

## 第9章

ダンブルドア校長はグリフィンドール生全員に大広間に戻るように言い渡した。

十分後に、ハッフルパフ、レイブンクロー、スリザリンの寮生も、みな当惑した表情で、全員大広間に集まった。

「先生たち全員で、城の中を隈なく搜索せねばならん」

マクゴナガル先生とフリットウィック先生が、大広間の戸という戸を全部閉めきっている間、ダンブルドア校長がそう告げた。

「ということは、気の毒じゃが、皆、今夜はここに泊ることになるだろうの。みんなの安全のためじゃ。監督生は大広間の入口の見張りに立ってもらおう。首席の二人に、ここの指揮を任せようぞ。何か不審なことがあれば、ただちにわしに知らせるように」

ダンブルドアは、厳めしくふんり返ったパーシーに向かって、最後に一言つけ加えた。

「ゴーストをわしへの伝令に使うがよい」ダンブルドアは大広間から出ていこうとしたが、ふと立ち止まった。

「おお、そうじゃ。必要なものがあったのう……」

ハラリと杖を振ると、長いテーブルが全部大広間の片隅に飛んでいき、きちんと壁を背にして並んだ。

もう一振りすると、何百個ものふかふかした紫色の寝袋が現われて、床いっぱいに敷き詰められた。

「ぐっすりおやすみ」大広間を出ていきながら、ダンブルドア校長が声をかけた。

たちまち、大広間中がガヤガヤうるさくなった。グリフィンドール生がほかの寮生に事件の話始めたのだ。

「みんな寝袋に入りなさい！」パーシーが大声で言った。

「さあ、さあ、おしゃべりはやめたまえ！ 消

## Chapter 9

### Grim Defeat

Professor Dumbledore sent all the Gryffindors back to the Great Hall, where they were joined ten minutes later by the students from Hufflepuff, Ravenclaw, and Slytherin, who all looked extremely confused.

“The teachers and I need to conduct a thorough search of the castle,” Professor Dumbledore told them as Professors McGonagall and Flitwick closed all doors into the hall. “I’m afraid that, for your own safety, you will have to spend the night here. I want the prefects to stand guard over the entrances to the hall and I am leaving the Head Boy and Girl in charge. Any disturbance should be reported to me immediately,” he added to Percy, who was looking immensely proud and important. “Send word with one of the ghosts.”

Professor Dumbledore paused, about to leave the hall, and said, “Oh, yes, you’ll be needing ...”

One casual wave of his wand and the long tables flew to the edges of the hall and stood themselves against the walls; another wave, and the floor was covered with hundreds of squashy purple sleeping bags.

“Sleep well,” said Professor Dumbledore, closing the door behind him.

The hall immediately began to buzz excitedly; the Gryffindors were telling the rest

灯まであと十分！」

「行こうぜ」

ロンがハリーとハーマイオニーに呼びかけ、三人はそれぞれ寝袋をつかんで隅の方に引きずっていった。

「ねえ、ブラックはまだ城の中だと思う？」ハーマイオニーが心配そうに囁いた。

「ダンブルドアは明らかにそう思ってるみたいだな」とロン。

「ブラックが今夜を選んでやってきたのはラッキーだったと思うわ」

三人とも服を着たままで寝袋に潜り込み、頬杖をつきながら話を続けた。

「だって今夜だけはみんな寮塔にいなかったんですもの……」

「きっと、逃亡中で時間の感覚がなくなったんだと思うな」ロンが言った。

「今日がハロウィーンだって気づかなかったんだよ。じゃなきゃこの広間を襲撃してたぜ」

ハーマイオニーが身震いした。そろりとハリーがハーマイオニーの手を撫でるとハーマイオニーは微かに笑った。

みんなが同じことを話し合っていた。

「いったいどうやって入り込んだんだろう？」

「『姿現わし術』を心得てたんだと思うな」ちょっと離れたところにいたレイブンクロー生が言った。

「ほら、どこからともなく突如現われるアレさ」

「変装してたんだ、きっと」ハッブルパフの五年生が言った。

「飛んできたのかも知れないぞ」ディーン・トーマスが言った。

「まったく。『ホグワーツの歴史』を読もうと思ったことがあるのは私一人だけだっていうの？」

of the school what had just happened.

“Everyone into their sleeping bags!” shouted Percy. “Come on, now, no more talking! Lights out in ten minutes!”

“C’mon,” Ron said to Harry and Hermione; they seized three sleeping bags and dragged them into a corner.

“Do you think Black’s still in the castle?” Hermione whispered anxiously.

“Dumbledore obviously thinks he might be,” said Ron.

“It’s very lucky he picked tonight, you know,” said Hermione as they climbed fully dressed into their sleeping bags and propped themselves on their elbows to talk. “The one night we weren’t in the tower. ...”

“I reckon he’s lost track of time, being on the run,” said Ron. “Didn’t realize it was Halloween. Otherwise he’d have come bursting in here.”

Hermione shuddered.

All around them, people were asking one another the same question: “*How did he get in?*”

“Maybe he knows how to Apparate,” said a Ravenclaw a few feet away. “Just appear out of thin air, you know.”

“Disguised himself, probably,” said a Hufflepuff fifth year.

“He could’ve flown in,” suggested Dean Thomas.

“Honestly, am I the *only* person who’s ever

「たぶんそうだろ」とロンが言った。

「どうしてそんなこと聞くんだ？」

「それはね、この城を護っているのは城壁だけじゃないってことなの。こっそり入り込めないように、ありとあらゆる呪文がかけられているのよ。ここでは『姿現わし』はできないわ。それに、吸魂鬼の裏をかくような変装があったら拝見したいものだわ。校庭の入口は一つ残らず吸魂鬼が見張って空を飛んできたって見つかったはずだわ。その上、秘密の抜け道はフィルチが全部知ってるから、そこも吸魂鬼が見逃してはいないはず……」

「灯りを消すぞ！」パーシーが怒鳴った。

「全員寝袋に入って、おしゃべりはやめ！」

蠟燭の灯がいっせいに消えた。

残された明りは、フワフワ漂いながら監督生たちと深刻な話をしている銀色のゴーストと、城の外の世界と同じように星がまたたく魔法の天井の光だけだった。

薄明りの中、大広間にヒソヒソと流れ続ける囁きの中で、ハリーはまるで静かな風の吹く戸外に横たわっているような気持ちになった。

一時間ごとに先生が一人ずつ大広間に入ってきて、何事もないかどうか確かめた。

やっとみんなが寝静まった朝の三時ごろ、ダンブルドア校長が入ってきた。

ハリーが見ていると、ダンブルドアはパーシーを探していた。

パーシーは寝袋の間を巡回して、おしゃべりをやめさせていた。

パーシーはハリーやロン、ハーマイオニーのすぐ近くにいたが、ダンブルドアの足音が近づいてきたので、三人とも急いで寝入りをした。

「先生、何か手がかりは？」パーシーが低い声で尋ねた。

「いや。ここは大丈夫かの？」

「異常なしです。先生」

「よろしい。何もいますぐ全員を移動させる

bothered to read *Hogwarts, A History*?” said Hermione crossly to Harry and Ron.

“Probably,” said Ron. “Why?”

“Because the castle’s protected by more than *walls*, you know,” said Hermione. “There are all sorts of enchantments on it, to stop people entering by stealth. You can’t just Apparate in here. And I’d like to see the disguise that could fool those dementors. They’re guarding every single entrance to the grounds. They’d have seen him fly in too. And Filch knows all the secret passages, they’ll have them covered. ...”

“The lights are going out now!” Percy shouted. “I want everyone in their sleeping bags and no more talking!”

The candles all went out at once. The only light now came from the silvery ghosts, who were drifting about talking seriously to the prefects, and the enchanted ceiling, which, like the sky outside, was scattered with stars. What with that, and the whispering that still filled the hall, Harry felt as though he were sleeping outdoors in a light wind.

Once every hour, a teacher would reappear in the hall to check that everything was quiet. Around three in the morning, when many students had finally fallen asleep, Professor Dumbledore came in. Harry watched him looking around for Percy, who had been prowling between the sleeping bags, telling people off for talking. Percy was only a short way away from Harry, Ron, and Hermione, who quickly pretended to be asleep as

ことはあるまい。グリフィンボールの門番には臨時の者を見つけておいた。明日になったら皆を寮に移動させるがよい」

「それで、『太った婦人』は？」

「三階のアーガイルシャーの地図の絵に隠れておる。合言葉を言わないブラックを通すのを拒んだらしいのう。それでブラックが襲った。婦人はまだ非常に動転しておるが、落ち着いてきたらフィルチに言って婦人を修復させようぞ」

ハリーの耳に大広間の戸がまた開く音が聞こえ、別の足音が聞こえた。

「校長ですか？」スネイプだ。

ハリーは身じろぎもせず聞き耳を立てた。

「四階は隈なく捜しました。ヤツはおりません。さらにフィルチが地下牢を捜しましたが、そこにも何もなしです」

「天文台の塔はどうかね？ トレローニー先生の部屋は？ ふくろう小屋は？」

「すべて捜しましたが……」

「セブルス、ご苦労じゃった。わしもブラックがいつまでもグズグズ残っているとは思っておらなかった」

「校長、ヤツがどうやって入ったか、何か思い当たることがおありですか？」スネイプが聞いた。

ハリーは腕にもたせていた頭をわずかに持ち上げて、もう一方の耳でも聞こえるようにした。

「セブルス、いろいろとあるが、どれもこれも皆ありえないことだな」

ハリーは薄目を開けて三人が立っているあたりを盗み見た。

ダンブルドアは背中を向けていたが、パーシーの全神経を集中させた顔とスネイプの怒ったような横顔が見えた。

「校長、先日 of 我々の会話を覚えておいででしょうな。たしかーあー——学期の始まったときの？」

Dumbledore's footsteps drew nearer.

“Any sign of him, Professor?” asked Percy in a whisper.

“No. All well here?”

“Everything under control, sir.”

“Good. There's no point moving them all now. I've found a temporary guardian for the Gryffindor portrait hole. You'll be able to move them back in tomorrow.”

“And the Fat Lady, sir?”

“Hiding in a map of Argyllshire on the second floor. Apparently she refused to let Black in without the password, so he attacked. She's still very distressed, but once she's calmed down, I'll have Mr. Filch restore her.”

Harry heard the door of the hall creak open again, and more footsteps.

“Headmaster?” It was Snape. Harry kept quite still, listening hard. “The whole of the third floor has been searched. He's not there. And Filch has done the dungeons; nothing there either.”

“What about the Astronomy tower? Professor Trelawney's room? The Owlery?”

“All searched ...”

“Very well, Severus. I didn't really expect Black to linger.”

“Have you any theory as to how he got in, Professor?” asked Snape.

Harry raised his head very slightly off his arms to free his other ear.

スネイプはほとんど唇を動かさずに話していた。

まるでパーシーを会話から閉め出そうとしているかのようだった。

「いかにも」ダンプルドアが答えた。

その言い方に警告めいた響きがあった。

「どうもー内部の者の手引きなしには、ブラックが本校に入るのはーほとんど不可能かと。我輩は、しかとご忠告申し上げました。校長が任命をー」

「この城の内部の者がブラックの手引きをしたとは、わしは考えておらん」

ダンプルドアの言い方に、この件は打ち切りと、スネイプに二の句を継がせないきっぱりとした調子があった。

「わしは吸魂鬼たちに会いにいかねければならん。搜索が終わったら知らせると言っているのな」とダンプルドアが言った。

「先生、吸魂鬼は手伝おうとは言わなかったのですか？」パーシーが聞いた。

「おお、言ったとも」ダンプルドアの声は冷ややかだった。

「わしが校長職にあるかぎり、吸魂鬼にはこの城の敷居は跨せん」

パーシーは少し恥じ入った様子だった。ダンプルドアは足早にそっと大広間を出ていった。

スネイプはその場に佇み、憤懣やる方ない表情で、校長を見送っていたが、やがて自分も部屋を出ていった。

ハリーが横目でロンとハーマイオニーを見ると、二人とも目を開けていた。

二人の目に天井の星が映っていた。

「いったいなんのことだろう」ロンが呟いた。

それから数日というもの、学校中シリウス・

“Many, Severus, each of them as unlikely as the next.”

Harry opened his eyes a fraction and squinted up to where they stood; Dumbledore’s back was to him, but he could see Percy’s face, rapt with attention, and Snape’s profile, which looked angry.

“You remember the conversation we had, Headmaster, just before — ah — the start of term?” said Snape, who was barely opening his lips, as though trying to block Percy out of the conversation.

“I do, Severus,” said Dumbledore, and there was something like warning in his voice.

“It seems — almost impossible — that Black could have entered the school without inside help. I did express my concerns when you appointed —”

“I do not believe a single person inside this castle would have helped Black enter it,” said Dumbledore, and his tone made it so clear that the subject was closed that Snape didn’t reply. “I must go down to the dementors,” said Dumbledore. “I said I would inform them when our search was complete.”

“Didn’t they want to help, sir?” said Percy.

“Oh yes,” said Dumbledore coldly. “But I’m afraid no dementor will cross the threshold of this castle while I am headmaster.”

Percy looked slightly abashed. Dumbledore left the hall, walking quickly and quietly. Snape stood for a moment, watching the headmaster with an expression of deep resentment

ブラックの話でもちきりだった。

どうやって城に入こ込んだのか、話に尾ひれがついてどんどん大きくなった。

ハッフルパフのハンナ・アボットときたら、薬草学の時間中ずっと、話を聞いてくれる人を捕まえては、ブラックは花の咲く灌木に変身できるのだとしゃべりまくった。

切り刻まれた「太った婦人」の肖像画は壁から取りはずされ、かわりにずんぐりした灰色のポニーに跨った「カドガン卿」の肖像画がかけられた。

これにはみんな大弱りだった。

カドガン卿は誰かれかまわず決闘を挑んだし、そうでなければ、とてつもなく複雑な合言葉をひねり出すのに余念がなかった。

そして少なくとも一日二回は合言葉を変えた。

「あの人、チョー狂ってるよ」シェーマス・フィネガンが頭にきてパーシーに訴えた。

「ほかに人はいないの？」

「どの絵もこの仕事を嫌ったんでね」パーシーが言った。

「『太った婦人』にあんなことがあったから、みんな怖がって、名乗り出る勇気があったのはカドガン卿だけだったんだ」

しかし、ハリーはカドガン卿を気にするどころではなかった。

いまやハリーを監視する目が大変だった。先生方は何かと理由をつけてはハリーと一緒に廊下を歩いたし、パーシー・ウィーズリーはハリーの察するところ、母親の言いつけなのだろうが、ハリーの行くところはどこにでもピットリついてきた。

まるでふんり返った番犬のようだった。極めつきは、マクゴナガル先生だった。

自分の部屋にハリーを呼んだとき、先生があまりに暗い顔をしているので、ハリーは誰かが死んだのかと思ったぐらいだった。

「ポッター、いまとなっては隠していてもしょうがありません」マクゴナガル先生の声は

on his face; then he too left.

Harry glanced sideways at Ron and Hermione. Both of them had their eyes open too, reflecting the starry ceiling.

“What was all that about?” Ron mouthed.

The school talked of nothing but Sirius Black for the next few days. The theories about how he had entered the castle became wilder and wilder; Hannah Abbott, from Hufflepuff, spent much of their next Herbology class telling anyone who'd listen that Black could turn into a flowering shrub.

The Fat Lady's ripped canvas had been taken off the wall and replaced with the portrait of Sir Cadogan and his fat gray pony. Nobody was very happy about this. Sir Cadogan spent half his time challenging people to duels, and the rest thinking up ridiculously complicated passwords, which he changed at least twice a day.

“He's a complete lunatic,” said Seamus Finnigan angrily to Percy. “Can't we get anyone else?”

“None of the other pictures wanted the job,” said Percy. “Frightened of what happened to the Fat Lady. Sir Cadogan was the only one brave enough to volunteer.”

Sir Cadogan, however, was the least of Harry's worries. He was now being closely watched. Teachers found excuses to walk along corridors with him, and Percy Weasley (acting, Harry suspected, on his mother's

深刻そのものだった。

「あなたにとってはショックかもしれませんが、実はシリウス・ブラックはー」

「僕を狙っていることは知っています」ハリーはもううんざりだという口調で言った。

「ロンのお父さんが、お母さんに話しているのを聞いてしまいました。ウィーズリーさんは魔法省にお勤めですから」

マクゴナガル先生はドキリとした様子だった。一瞬ハリーを見つめたが、すぐに言葉を続けた。

「よろしい！それでしたら、ポッター、あなたが夕刻にクィディッチの練習をするのはあまり好ましいことではないという私の考えが、わかってもらえるでしょうね。あなたとチームのメンバーだけがグラウンドに出ているのは、あまりに危険ですし、あなたはー」

「土曜日に最初の試合があるんです！」ハリーは気を昂ぶらせた。

「先生、絶対練習しないと！」マクゴナガル先生はじっとハリーを見つめた。

ハリーは、マクゴナガル先生がグリフィンドール・チームの勝算に、大きな関心を寄せていることを知っていた。

そもそもハリーをシーカーにしたのは、マクゴナガル先生自身なのだ。

ハリーは息をこらして先生の言葉を待った。

「フム……」

マクゴナガル先生は立ち上がり、窓から雨に霞むクィディッチ・グラウンドを見つめた。

「そう……まったく、今度こそ優勝杯を獲得したいものです……しかし、それはそれ、これはこれ。ポッター……私としては、誰か先生に付き添っていただければよく安心です。フーチ先生に練習の監督をしていただきましょう」

第一回のクィディッチ試合が近づくとつれ

orders) was tailing him everywhere like an extremely pompous guard dog. To cap it all, Professor McGonagall summoned Harry into her office, with such a somber expression on her face Harry thought someone must have died.

“There’s no point hiding it from you any longer, Potter,” she said in a very serious voice. “I know this will come as a shock to you, but Sirius Black —”

“I know he’s after me,” said Harry wearily. “I heard Ron’s dad telling his mum. Mr. Weasley works for the Ministry of Magic.”

Professor McGonagall seemed very taken aback. She stared at Harry for a moment or two, then said, “I see! Well, in that case, Potter, you’ll understand why I don’t think it’s a good idea for you to be practicing Quidditch in the evenings. Out on the field with only your team members, it’s very exposed, Potter —”

“We’ve got our first match on Saturday!” said Harry, outraged. “I’ve got to train, Professor!”

Professor McGonagall considered him intently. Harry knew she was deeply interested in the Gryffindor team’s prospects; it had been she, after all, who’d suggested him as Seeker in the first place. He waited, holding his breath.

“Hmm …” Professor McGonagall stood up and stared out of the window at the Quidditch field, just visible through the rain. “Well … goodness knows, I’d like to see us win the Cup at last … but all the same, Potter … I’d be happier if a teacher were present. I’ll ask

て、天候は着実に悪くなっていった。

それにもめげず、グリフィンボール・チームはフーチ先生の見守る中、以前にもまして激しい練習を続けた。

そして、土曜日の試合を控えた最後の練習のとき、オリバー・ウッドがいやな知らせを持ってきた。

「対戦相手はスリザリンではない！」ウッドはカンカンになってチームにそう伝えた。

「フリントがいましがた会いにきた。我々はハッフルパフと対戦することになった！」

「どうして？」チーム全員が同時に聞き返した。

「フリントのやつ、シーカーの腕がまだ治ってないからとぬかした」ウッドはギリリと齒乱りした。

「理由は知れたこと。こんな天気じゃプレイしたくないってわけだ。これじゃ自分たちの勝ち目が薄いと読んだんだ……」

その日は一日中強い雨風が続き、ウッドが話している間にも遠い雷鳴が聞こえてきた。

「マルフォイの腕はどこも悪くない！」ハリーは怒った。

「悪いふりをしてるんだ！」

「わかってるさ。しかし、証明できない」ウッドが吐き捨てるように言った。

「我々がこれまで練習してきた戦略は、スリザリンを対戦相手に想定していた。それが、ハッフルパフときた。あいつらのスタイルはまた全然違う。あそこはキャプテンが新しくなった。シーカーのセドリック・ディゴリーだ——」

アンジェリーナ、アリシア、ケイティの三人が急にクスクス笑いをした。

「なんだ——」この一大事に不謹慎なと、ウッドは顔をしかめた。

「あの背の高いハンサムな人でしょう？」アンジェリーナが言った。

Madam Hooch to oversee your training sessions.”

The weather worsened steadily as the first Quidditch match drew nearer. Undaunted, the Gryffindor team was training harder than ever under the eye of Madam Hooch. Then, at their final training session before Saturday’s match, Oliver Wood gave his team some unwelcome news.

“We’re not playing Slytherin!” he told them, looking very angry. “Flint’s just been to see me. We’re playing Hufflepuff instead.”

“Why?” chorused the rest of the team.

“Flint’s excuse is that their Seeker’s arm’s still injured,” said Wood, grinding his teeth furiously. “But it’s obvious why they’re doing it. Don’t want to play in this weather. Think it’ll damage their chances. ...”

There had been strong winds and heavy rain all day, and as Wood spoke, they heard a distant rumble of thunder.

“There’s *nothing* wrong with Malfoy’s arm!” said Harry furiously. “He’s faking it!”

“I know that, but we can’t prove it,” said Wood bitterly. “And we’ve been practicing all those moves assuming we’re playing Slytherin, and instead it’s Hufflepuff, and their style’s quite different. They’ve got a new Captain and Seeker, Cedric Diggory ——”

Angelina, Alicia, and Katie suddenly giggled.



「無口で強そうな」とケイティが言うと、三人でまたクスクス笑いが始まった。

「無口だろうさ。二つの言葉をつなげる頭もないからな」フレッドがイライラしながら言った。

「オリバー、何も心配する必要はないだろう？ ハッフルパフなんて、一ひねりだ。前回の試合じゃ、ハリーが五分かそこいらでスニッチを取っただろう？」

「今度の試合は状況がまるっきり違うのだ！」ウッドが目をむいて叫んだ。

「ディゴリーは強力なチームを編成した！ 優秀なシーカーだ！ 諸君がそんなふうに甘く考えることを俺は恐れていた！ 我々は気を抜いてはならない！ あくまで神経を集中せよ！ 我々に揺さぶりをかけようとしているのだ！ 我々は勝たねはならん！」

「オリバー、落ち着けよ！」フレッドは毒気を抜かれたような顔をした。

「俺たち、ハッフルパフのことをまじめに考えてるさ。クソまじめさ」

試合前日、風は唸りを上げ、雨は一層激しく降った。廊下も教室も真っ暗で、松明や蠟燭の数を増やしたほどだった。

スリザリン・チームは余裕しゃくしゃくで、マルフォイが一番得意そうだった。

「ああ、腕がもう少しなんとかあったらなあ！」窓を打つ嵐をよそに、マルフォイがため息をついた。

ハリーの頭は明日の試合のことでいっぱいだった。オリバー・ウッドが授業の合間に急いでやってきては、ハリーに指示を与えた。

三度目のとき、ウッドの話が長すぎて、気がついたときにはハリーは「闇の魔術に対する防衛術」のクラスに十分も遅れていた。

急いで駆け出すと、後ろからウッドの大声が追いかけてきた。

「ディゴリーは急旋回が得意だ。ハリー、宙返りでかわすのがいい！」

“What?” said Wood, frowning at this lighthearted behavior.

“He’s that tall, good-looking one, isn’t he?” said Angelina.

“Strong and silent,” said Katie, and they started to giggle again.

“He’s only silent because he’s too thick to string two words together,” said Fred impatiently. “I don’t know why you’re worried, Oliver, Hufflepuff is a pushover. Last time we played them, Harry caught the Snitch in about five minutes, remember?”

“We were playing in completely different conditions!” Wood shouted, his eyes bulging slightly. “Diggory’s put a very strong side together! He’s an excellent Seeker! I was afraid you’d take it like this! We mustn’t relax! We must keep our focus! Slytherin is trying to wrong-foot us! We *must* win!”

“Oliver, calm down!” said Fred, looking slightly alarmed. “We’re taking Hufflepuff very seriously. *Seriously.*”

The day before the match, the winds reached howling point and the rain fell harder than ever. It was so dark inside the corridors and classrooms that extra torches and lanterns were lit. The Slytherin team was looking very smug indeed, and none more so than Malfoy.

“Ah, if only my arm was feeling a bit better!” he sighed as the gale outside pounded the windows.

Harry had no room in his head to worry

ハリーは「闇の魔術に対する防衛術」の教室の前で急停止し、ドアを開けて中に飛び込んだ。

「遅れてすみません。ルーピン先生、僕——」きょうだん教壇の机から顔を上げたのは、ルーピン先生ではなく、スネイプだった。「授業は十分前に始まったぞ、ポッター。であるからグリフィンボールは十点減点とする。座れ」しかしハリーは動かなかった。

「ルーピン先生は？」

「今日は気分が悪く、教えられないとのことだ」スネイプの口元に歪んだ笑いが浮かん

だ。「座れと言ったはずだが？」それでもハリーは動かなかった。

「どうなされたのですか？」スネイプはガラリと暗い目を光らせた。

「命に別状はない」別状があればいいのにとでも言いたげだった。

「グリフィンボール、さらに五点減点。もう一度我輩に『座れ』と言わせたら、五十点減点する」

ハリーはのろのろと自分の席まで歩いていき、腰をかけた。スネイプはクラスをズイと見回した。

「ポッターが邪魔をする前に話していたことであるが、ルーピン先生はこれまでどのような内容を教えたのか、まったく記録を残していないからして——」

「先生、これまでやったのは、まね妖怪、赤帽鬼、河童、水魔です」ハーマイオニーが一気に答えた。

「これからやる予定だったのは——」

「だまれ」スネイプが冷たく言った。

「教えてくれと言ったわけではない。我輩はただ、ルーピン先生のだらしなさを指摘しただけである」

「ルーピン先生はこれまでの『闇の魔術に対する防衛術』の先生の中で一番よい先生で

about anything except the match tomorrow. Oliver Wood kept hurrying up to him between classes and giving him tips. The third time this happened, Wood talked for so long that Harry suddenly realized he was ten minutes late for Defense Against the Dark Arts, and set off at a run with Wood shouting after him, “Diggory’s got a very fast swerve, Harry, so you might want to try looping him —”

Harry skidded to a halt outside the Defense Against the Dark Arts classroom, pulled the door open, and dashed inside.

“Sorry I’m late, Professor Lupin, I —”

But it wasn’t Professor Lupin who looked up at him from the teacher’s desk; it was Snape.

“This lesson began ten minutes ago, Potter, so I think we’ll make it ten points from Gryffindor. Sit down.”

But Harry didn’t move.

“Where’s Professor Lupin?” he said.

“He says he is feeling too ill to teach today,” said Snape with a twisted smile. “I believe I told you to sit down?”

But Harry stayed where he was.

“What’s wrong with him?”

Snape’s black eyes glittered.

“Nothing life-threatening,” he said, looking as though he wished it were. “Five more points from Gryffindor, and if I have to ask you to sit down again, it will be fifty.”

Harry walked slowly to his seat and sat

す」

ディーン・トーマスの勇敢な発言を、クラス中がガヤガヤと支持した。

スネイプの顔が一層威嚇的になった。

「点の甘いことよ。ルーピンは諸君に対して著しく厳しさに欠ける——赤帽鬼や水魔など、一年坊主でもできることだろう。我々が今日学ぶのは——」

ハリーが見ていると、スネイプ先生は教科書の一番後ろまでページをめくっていた。

ここなら生徒はまだ習っていないと知っているに違いない。

「——人狼である」とスネイプが言った。

「でも、先生」ハーマイオニーは我慢できずに発言した。

「まだ狼人間までやる予定ではありません。これからやる予定なのは、ヒンキーバンクで——」

「ミス・グレンジャー」スネイプの声は恐ろしく静かだった。

「この授業は我輩が教えているのであり、君ではないはずだが。その我輩が、諸君に三九四ページをめくるようにと言っているのだ」

スネイプはもう一度ズイとクラスを見回した。

「全員！ いますぐだ！

あちこちで苦々しげに目配せが交わされ、ブツブツ文句を言う生徒もいたが、全員が教科書を開いた。

「人狼と真の狼とをどうやって見分けるか、わかるものはいるか——」

スネイプが聞いた。

みんなシーンと身動きもせず座り込んだままだった。

ハーマイオニーだけが、いつものように勢いよく手を挙げた。

「誰かいるか？」スネイプはハーマイオニーを無視した。

down. Snape looked around at the class.

“As I was saying before Potter interrupted, Professor Lupin has not left any record of the topics you have covered so far —”

“Please, sir, we’ve done boggarts, Red Caps, kappas, and grindylows,” said Hermione quickly, “and we’re just about to start —”

“Be quiet,” said Snape coldly. “I did not ask for information. I was merely commenting on Professor Lupin’s lack of organization.”

“He’s the best Defense Against the Dark Arts teacher we’ve ever had,” said Dean Thomas boldly, and there was a murmur of agreement from the rest of the class. Snape looked more menacing than ever.

“You are easily satisfied. Lupin is hardly overtaxing you — I would expect first years to be able to deal with Red Caps and grindylows. Today we shall discuss —”

Harry watched him flick through the textbook, to the very back chapter, which he must know they hadn’t covered.

“— werewolves,” said Snape.

“But, sir,” said Hermione, seemingly unable to restrain herself, “we’re not supposed to do werewolves yet, we’re due to start hinkypunks —”

“Miss Granger,” said Snape in a voice of deadly calm, “I was under the impression that I am teaching this lesson, not you. And I am telling you all to turn to page 394.” He glanced around again. “All of you! Now!”

口元にはあの薄ら笑いが戻っている。

「すると、何かね。ルーピン先生は諸君に、基本的な両者の区別さえまだ教えていないと——」

「お話ししたはずです」パーパティが突然口をきいた。

「わたしたち、まだ狼人間まで行ってません。いまはまだ——」

「だまれ！」

スネイプが唸るように言った。

「さて、さて、さて、三年生にもなって、人狼に出会っても見分けもつかない生徒にお目にかかろうとは、我輩は考えてもみなかった。諸君の学習がどんなに遅れているか、ダンブルドア校長にしっかりお伝えしておこう」

「先生」ハーマイオニーはまだしっかり手を挙げたままだった。

「狼人間はいくつか細かいところでほんとうの狼と違っています。狼人間の鼻面は——」

「勝手にしゃしゃり出てきたのはこれで二度目だ。ミス・グレンジャー」冷ややかにスネイプが言った。

「鼻持ちならない知ったかぶりで、グリフィンドールからさらに五点減点する」

ハーマイオニーは真っ赤になって手を下ろし、目に涙をいっぱい浮かべてじっとうつむいた。

クラスの誰もが、少なくとも一度はハーマイオニーを「知ったかぶり」と呼んでいる。

それなのに、みんながスネイプを睨みつけた。

クラス中の生徒がスネイプに対する嫌悪感を募らせたのだ。

ロンは少なくとも週に二回はハーマイオニーに面と向かって「知ったかぶり」というくせに、大声でこう言った。

「先生はみんなに質問しました。ハーマイオニーはその答えを知っているんです！ 答えて

With many bitter sidelong looks and some sullen muttering, the class opened their books.

“Which of you can tell me how we distinguish between the werewolf and the true wolf?” said Snape.

Everyone sat in motionless silence; everyone except Hermione, whose hand, as it so often did, had shot straight into the air.

“Anyone?” Snape said, ignoring Hermione. His twisted smile was back. “Are you telling me that Professor Lupin hasn’t even taught you the basic distinction between —”

“We told you,” said Parvati suddenly, “we haven’t got as far as werewolves yet, we’re still on —”

“*Silence!*” snarled Snape. “Well, well, well, I never thought I’d meet a third-year class who wouldn’t even recognize a werewolf when they saw one. I shall make a point of informing Professor Dumbledore how very behind you all are. ...”

“Please, sir,” said Hermione, whose hand was still in the air, “the werewolf differs from the true wolf in several small ways. The snout of the werewolf —”

“That is the second time you have spoken out of turn, Miss Granger,” said Snape coolly. “Five more points from Gryffindor for being an insufferable know-it-all.”

Hermione went very red, put down her hand, and stared at the floor with her eyes full of tears. It was a mark of how much the class loathed Snape that they were all glaring at him,

欲しくないのならなぜ質問するんですか？」  
言い過ぎた、とみんながとっさにそう思った。クラス中が息をひそめる中、スネイプはじりじりとロンに近づいた。

「処罰だ。ウィーズリー」スネイプは顔をロンにくっつけるようにして、スルリと言い放った。

「さらに、我輩の教え方を君が批判するのが、再び我輩の耳に入った暁には、君は非常に後悔することになるだろう」

それからあとは、物音をたてる者もいなかった。机に座って教科書から狼人間に関して写し書きをした。

スネイプは机の間を往ったり来たりして、ルーピン先生が何を教えていたかを調べて回った。

「実にへたな説明だ……これはまちがいだ。河童はむしろ蒙古によく見られる……ルーピン先生はこれで十点満点中八点も？ 我輩なら三点もやれん……」やっとベルが鳴ったとき、スネイプはみんなを引き止めた。

「各自レポートを書き、我輩に提出するよう。人狼の見分け方と殺し方についてだ。羊皮紙二巻、月曜の朝までに提出したまえ。このクラスは、そろそろ誰かが締めてかからねばならん。ウィーズリー残りたまえ。処罰の仕方を決めねばならん」

ハリーとハーマイオニーは、クラスのみならず外に出た。

教室まで声が届かないところまでくると、みんな堰を切ったように、スネイプ攻撃をぶちまけた。

「いくらあの授業の先生になりたいからといって、スネイプはほかの『闇の魔術に対する防衛術』の先生にあんなふうだったことはないよ。いったいルーピンになんの恨みがあるんだろう？ 例のポガート『まね妖怪』のせいだと思うかい？」

ハリーはハーマイオニーに言った。

「わからないわ」ハーマイオニーが沈んだ口

because every one of them had called Hermione a know-it-all at least once, and Ron, who told Hermione she was a know-it-all at least twice a week, said loudly, “You asked us a question and she knows the answer! Why ask if you don’t want to be told?”

The class knew instantly he’d gone too far. Snape advanced on Ron slowly, and the room held its breath.

“Detention, Weasley,” Snape said silkily, his face very close to Ron’s. “And if I ever hear you criticize the way I teach a class again, you will be very sorry indeed.”

No one made a sound throughout the rest of the lesson. They sat and made notes on werewolves from the textbook, while Snape prowled up and down the rows of desks, examining the work they had been doing with Professor Lupin.

“Very poorly explained ... That is incorrect, the kappa is more commonly found in Mongolia. ... Professor Lupin gave this eight out of ten? I wouldn’t have given it three. ...”

When the bell rang at last, Snape held them back.

“You will each write an essay, to be handed in to me, on the ways you recognize and kill werewolves. I want two rolls of parchment on the subject, and I want them by Monday morning. It is time somebody took this class in hand. Weasley, stay behind, we need to arrange your detention.”

Harry and Hermione left the room with the

調で答えた。

「でも、ほんとに、早くルーピン先生がお元気になるってほしい……」五分後にロンが追いついてきた。

カンカンに怒っている。

「聞いてくれよ。あの×××」(ロンがスネイプを「×××」と呼んだので、ハーマイオニーは「ロン! と叫んだ)

「×××が僕に何をさせると思う? 医務室のおまるを磨かせられるんだ。魔法なしだぜ!」ロンは拳を握り締め、息を深く吸い込んだ。

「ブラックがスネイプの研究室に隠れててくれたらなあ。そしたらスネイプを始末してくれたかもしれないよ!」

つぎの日、ハリーは早々と目が覚めた。まだ外は暗かった。一瞬、風の捻りで目が覚めたかと思った。

が、つぎの瞬間、首の後ろに冷たい風が吹きつけるのを感じて、ハリーはガバッと起き上がった。ポルターガイストのビープズがすぐそばに浮かんでいて、ハリーの耳元に息を吹きつけていた。

「どうしてそんなことをするんだい?」ハリーは怒った。

ビープズは頬を膨らませ、勢いよくもう一吹きし、ケタケタ笑いながら吹いた息の反動で後退して、部屋から出ていった。

ハリーは手探りで目覚し時計を見つけ、時間を見た。四時半。

ビープズを罵りながら、ハリーは寝返りを打ち、眠ろうとした。

しかし、いったん目覚めてしまうと、ゴロゴロという雷鳴や、城の壁を打つ風の音、遠くの「禁じられた森」の木々の乱み合う音について振り払えない。

あと数時間で、ハリーはこの風を突いて、クイディッチのフィールドに出ていくのだ。

ついにハリーは寝るのをあきらめ、起き上がって服を着た。

rest of the class, who waited until they were well out of earshot, then burst into a furious tirade about Snape.

“Snape’s never been like this with any of our other Defense Against the Dark Arts teachers, even if he did want the job,” Harry said to Hermione. “Why’s he got it in for Lupin? D’you think this is all because of the boggart?”

“I don’t know,” said Hermione pensively. “But I really hope Professor Lupin gets better soon. ...”

Ron caught up with them five minutes later, in a towering rage.

“D’you know what that —” (he called Snape something that made Hermione say “*Ron!*”) “— is making me do? I’ve got to scrub out the bedpans in the hospital wing. *Without magic!*” He was breathing deeply, his fists clenched. “Why couldn’t Black have hidden in Snape’s office, eh? He could have finished him off for us!”

Harry woke extremely early the next morning; so early that it was still dark. For a moment he thought the roaring of the wind had woken him. Then he felt a cold breeze on the back of his neck and sat bolt upright — Peeves the Poltergeist had been floating next to him, blowing hard in his ear.

“What did you do that for?” said Harry furiously.

Peeves puffed out his cheeks, blew hard,

ニンバス2000を手にして、ハリーはそっと寝室を出た。

寝室のドアを開けたとたん、ハリーの足元を何かがかすった。

間一髪、かがんで捕まえたのはクルックシャンクスのボサボサの尻尾だった。

そのまま部屋の外に引っ張り出した。

「君のことをロンがいろいろ言うのは、たしかに当たってると思うよ」

ハリーは、クルックシャンクスを怪しむように話しかけた。

「ネズミならほかにたくさんいるじゃないか。そっちを追いかけてよ。さあ」

ハリーは足でクルックシャンクスを螺旋階段の方に押しやった。

「スキバーズには手を出すんじゃないよ」  
嵐の音は談話室の方がはっきり聞こえた。

試合がキャンセルになると考えるほどハリーは甘くはなかった。

嵐だろうが、雷だろうが、そんな些細なことでクィディッチが中止されたことはない。

しかし、ハリーの不安感は募った。

ウッドが以前廊下で、あれがセドリック・ディゴリーだと教えてくれた。

五年生で、ハリーよりずっと大きかった。

シーカーは軽くてすばやいのが普通だが、ディゴリーの重さはこの天候では有利かもしれない。

吹き飛ばされてコースを外れる可能性が低いからだ。

ハリーは夜明けまで暖炉の前で時間をつぶし、ときどき立ち上がっては、性懲りもなく男子寮の階段に忍び寄るクルックシャンクスを押さえていた。

ずいぶんたってから、ハリーはもう朝食の時間だろうと思い、肖像画の穴を一人でくぐっていった。

and zoomed backward out of the room, cackling.

Harry fumbled for his alarm clock and looked at it. It was half past four. Cursing Peeves, he rolled over and tried to get back to sleep, but it was very difficult, now that he was awake, to ignore the sounds of the thunder rumbling overhead, the pounding of the wind against the castle walls, and the distant creaking of the trees in the Forbidden Forest. In a few hours he would be out on the Quidditch field, battling through that gale. Finally, he gave up any thought of more sleep, got up, dressed, picked up his Nimbus Two Thousand, and walked quietly out of the dormitory.

As Harry opened the door, something brushed against his leg. He bent down just in time to grab Crookshanks by the end of his bushy tail and drag him outside.

“You know, I reckon Ron was right about you,” Harry told Crookshanks suspiciously. “There are plenty of mice around this place — go and chase them. Go on,” he added, nudging Crookshanks down the spiral staircase with his foot. “Leave Scabbers alone.”

The noise of the storm was even louder in the common room. Harry knew better than to think the match would be canceled; Quidditch matches weren't called off for trifles like thunderstorms. Nevertheless, he was starting to feel very apprehensive. Wood had pointed out Cedric Diggory to him in the corridor; Diggory was a fifth year and a lot bigger than Harry.

「立て！ かってこい！ 腰抜けめ！」 カドガン卿が喚いた。

「よしてくれよ」 ハリーは欠伸で応じた。  
オートミールをたっぷり食べると少し生き返った。

トーストを食べはじめるころにはほかのチーム・メイトも全員現われた。

「今日ではてこずるぞ」 ウッドはなんにも食べずにそう言った。

「オリバー、心配するのはやめて」 アリシアがなだめるように言った。

「ちょっとぐらいの雨はへいちゃらよ」  
しかし、雨は「ちょっとぐらい」どころではなかった。

それでも、なにしろ大人気のクィディッチのことなので、学校中がいつものように試合を見に外に出た。

荒れ狂う風に向かってみんな頭を低く下げ、競技場までの芝生を駆け抜けたが、傘は途中で手からもぎ取られるように吹き飛ばされた。

ロッカールームに入る直前、マルフォイ、クラブ、ゴイルが巨大な傘をさして競技場に向かいながら、ハリーを指差して笑っているのが見えた。

チーム全員が紅のユニフォームに着替えて、いつものように試合前のウッドの激励演説を待った。

しかし、演説はなしだった。

ウッドは何度か話し出そうとしたが、何かを飲み込むような奇妙な音を出し、力なく頭を振り、みんなについてこいと合図した。

フィールドに出ていくと、風のものすごさに、みんな横ざまによろめいた。

耳をつんざく雷鳴がまたしても鳴り渡り、観衆が声援していても、掻き消されて耳には入らなかった。

雨がハリーのメガネを打った。

こんな中でどうやってスニッチを見つけられ

Seekers were usually light and speedy, but Diggory's weight would be an advantage in this weather because he was less likely to be blown off course.

Harry whiled away the hours until dawn in front of the fire, getting up every now and then to stop Crookshanks from sneaking up the boys' staircase again. At long last Harry thought it must be time for breakfast, so he headed through the portrait hole alone.

“Stand and fight, you mangy cur!” yelled Sir Cadogan.

“Oh, shut up,” Harry yawned.

He revived a bit over a large bowl of porridge, and by the time he'd started on toast, the rest of the team had turned up.

“It's going to be a tough one,” said Wood, who wasn't eating anything.

“Stop worrying, Oliver,” said Alicia soothingly, “we don't mind a bit of rain.”

But it was considerably more than a bit of rain. Such was the popularity of Quidditch that the whole school turned out to watch the match as usual, but they ran down the lawns toward the Quidditch field, heads bowed against the ferocious wind, umbrellas being whipped out of their hands as they went. Just before he entered the locker room, Harry saw Malfoy, Crabbe, and Goyle, laughing and pointing at him from under an enormous umbrella on their way to the stadium.

The team changed into their scarlet robes and waited for Wood's usual pre-match pep



るというのか？

フィールドの反対側から、カナリア・イエローのユニフォームを着たハッフルパフの選手が入場した。

キャプテン同士が歩み寄って握手した。

ディゴリーは微笑んだが、ウッドは口が開かなくなったかのように頷いただけだった。

ハリーの目には、フーチ先生の口の形が、「箒に乗って」と言っているように見えた。

ハリーは右足を泥の中からズボッと抜き、ニンバス 2 0 0 0 に跨った。

フーチ先生がホイッスルを唇に当て、吹いた。

鋭い音が遠くの方に聞こえた——試合開始だ。

ハリーは急上昇したが、ニンバスが風に煽られてやや流れた。

できるだけまっすぐ箒を握り締め、目を細め、雨を透かして方向を見定めながらハリーは飛んだ。

五分もすると、ハリーは芯までびしょ濡れになく、凍えていた。

ほかのチーム・メイトはほとんど見えず、ましてや小さなスニッチなど見えるわけがなかった。

グラウンドの上空をあっちへ飛び、こっちへ飛び、輪郭のぼやけた紅色やら黄色やらの物体の間を抜けながら飛んだ。

いったい試合がどうなっているのかもわからない。

解説者の声は風で聞こえはしなかった。

観衆はマントや破れ傘に隠れて見えはしない。

ブラッジャーが二度、ハリーを箒から叩き落としそうになった。

メガネが雨で曇り、ブラッジャーの襲撃が見えなかったのだ。

時間の感覚がなくなった。

talk, but it didn't come. He tried to speak several times, made an odd gulping noise, then shook his head hopelessly and beckoned them to follow him.

The wind was so strong that they staggered sideways as they walked out onto the field. If the crowd was cheering, they couldn't hear it over the fresh rolls of thunder. Rain was splattering over Harry's glasses. How on earth was he going to see the Snitch in this?

The Hufflepuffs were approaching from the opposite side of the field, wearing canary-yellow robes. The Captains walked up to each other and shook hands; Diggory smiled at Wood but Wood now looked as though he had lockjaw and merely nodded. Harry saw Madam Hooch's mouth form the words, "Mount your brooms." He pulled his right foot out of the mud with a squelch and swung it over his Nimbus Two Thousand. Madam Hooch put her whistle to her lips and gave it a blast that sounded shrill and distant — they were off.

Harry rose fast, but his Nimbus was swerving slightly with the wind. He held it as steady as he could and turned, squinting into the rain.

Within five minutes Harry was soaked to his skin and frozen, hardly able to see his teammates, let alone the tiny Snitch. He flew backward and forward across the field past blurred red and yellow shapes, with no idea of what was happening in the rest of the game. He couldn't hear the commentary over the wind. The crowd was hidden beneath a sea of cloaks

箒をまっすぐ持っているのがだんだん難しくなった。

まるで夜が足を速めてやってきたかのよう  
に、空はますます暗くなっていった。

二度、ハリーはほかの選手にぶつかりそうに  
なった。

敵か味方かもわからなかった。

なにしろみんなぐしょ濡れだし、雨はどしゃ  
降りだし、ハリーには選手の見分けがつか  
なかった。

最初の稲妻が光ったとき、フーチ先生のホイ  
ッスルが鳴り響いた。

どしゃ降りの雨のむこう側に、かろうじてウ  
ッドのおぼろげな輪郭が見えた。

ハリーにグラウンドに下りてこいと合図して  
いる。

チーム全員が泥の中にバシャツと着地した。

「タイム・アウトを要求した！」ウッドが吼  
えるように言った。

「集まれ。この下にー」グラウンドの片隅  
の大きな傘の下で、選手がスクラムを組ん  
だ。

ハリーはメガネをはずしてユニフォームで手  
早く拭った。

「スコアはどうなっているの？」

「我々が五十点リードだ。だが、早くスニッ  
チを取らないと夜にもつれ込むぞ」とウッド  
が言った。

「こいつをかけてたら、僕、全然だめだよ」  
メガネをブラブラさせながら、ハリーが腹立  
たしげに言った。

ちょうどそのとき、ハーマイオニーがハリー  
のすぐ後ろに現われた。

マントを頭からすっぽりかぶって、なんだか  
ニッコリしている。

「ハリー、いい考えがあるの。メガネをよこ  
して。早く！」

ハリーはメガネを渡した。チーム全員がなん

and battered umbrellas. Twice Harry came  
very close to being unseated by a Bludger; his  
vision was so clouded by the rain on his  
glasses he hadn't seen them coming.

He lost track of time. It was getting harder  
and harder to hold his broom straight. The sky  
was getting darker, as though night had  
decided to come early. Twice Harry nearly hit  
another player, without knowing whether it  
was a teammate or opponent; everyone was  
now so wet, and the rain so thick, he could  
hardly tell them apart. ...

With the first flash of lightning came the  
sound of Madam Hooch's whistle; Harry could  
just see the outline of Wood through the thick  
rain, gesturing him to the ground. The whole  
team splashed down into the mud.

"I called for time-out!" Wood roared at his  
team. "Come on, under here —"

They huddled at the edge of the field under  
a large umbrella; Harry took off his glasses and  
wiped them hurriedly on his robes.

"What's the score?"

"We're fifty points up," said Wood, "but  
unless we get the Snitch soon, we'll be playing  
into the night."

"I've got no chance with these on," Harry  
said exasperatedly, waving his glasses.

At that very moment, Hermione appeared at  
his shoulder; she was holding her cloak over  
her head and was, inexplicably, beaming.

"I've had an idea, Harry! Give me your

だろうと見守る中で、ハーマイオニーはメガネを杖でコツコツ叩き、呪文を唱えた。

「インパービラス！<防水せよ>」

「はい！」ハーマイオニーはメガネをハリーに返ししながら言った。

「これで水を弾くわ！」

ウッドはハーマイオニーにキスしかねない顔をした。

「よくやった！」

ハーマイオニーがまた観衆の中に戻っていく後ろ姿に向かって、ウッドがガラガラ声で叫んだ。

「オーケー。さあみんな、しまっていこう！」

ハーマイオニーの呪文は抜群に効いた。

ハリーは相変わらず寒さでかじかんでいたし、こんなに濡れたことはないというほどびしょ濡れだったが、とにかく目は見えた。

気持ちを引き締め、ハリーは乱気流の中で箒に活を入れた。スニッチを探して四方八方に目を凝らし、ブラッジャーを避け、反対側からシューッと飛んできたディゴリーの下をかいぐり……。

また雷がバリバリッと鳴り、樹木のように枝分かれした稲妻が走った。ますます危険になってきた。

早くスニッチを捕まえなければフィールドの中心に戻ろうとして、ハリーは向きを変えた。

そのとたんピカッときた稲妻がスタンドを照らし、ハリーの目に何かが飛び込んできた——巨大な毛むくじゃらの黒い犬が、空をバックに、くっきりと影絵のように浮かび上がったのだ。

一番上の誰もいない席に、じっとしている。ハリーは完全に集中力を失った。

かじかんだ指が箒の柄を滑り落ち、ニンバスはズンと一メートルも落下した。

頭を振って目についたぐしょ濡れの前髪を払

glasses, quick!”

He handed them to her, and as the team watched in amazement, Hermione tapped them with her wand and said, “*Impervius!*”

“There!” she said, handing them back to Harry. “They’ll repel water!”

Wood looked as though he could have kissed her.

“Brilliant!” he called hoarsely after her as she disappeared into the crowd. “Okay, team, let’s go for it!”

Hermione’s spell had done the trick. Harry was still numb with cold, still wetter than he’d ever been in his life, but he could see. Full of fresh determination, he urged his broom through the turbulent air, staring in every direction for the Snitch, avoiding a Bludger, ducking beneath Diggory, who was streaking in the opposite direction. ...

There was another clap of thunder, followed immediately by forked lightning. This was getting more and more dangerous. Harry needed to get the Snitch quickly —

He turned, intending to head back toward the middle of the field, but at that moment, another flash of lightning illuminated the stands, and Harry saw something that distracted him completely — the silhouette of an enormous shaggy black dog, clearly imprinted against the sky, motionless in the topmost, empty row of seats.

Harry’s numb hands slipped on the broom handle and his Nimbus dropped a few feet.

い、ハリーはもう一度スタンドの方をじっと見た。

犬の姿は消えていた。

「ハリー！」グリフィンボールのゴールから、ウッドの振り絞るような叫びが聞こえた。

「ハリー、後ろだ！」

慌てて見回すと、セドリック・ディゴリーが上空を猛スピードで飛んでいる。

ハリーとセドリックの間の空間はびっしりと雨で埋まり、その中にキラッキラッと小さな点のような金色の光……。

ショックでどリッとしながら、ハリーは箒の柄の上に真っ平らに身を伏せて、スニッチめがけて突進した。

雨が嵐しく顔を打つ。

「がんばれ！」ハリーは歯を食いしばってニンバスに呼びかけた。「もっとはやく！」

突然、奇妙なことが起こった。競技場にサーッと気味の悪い沈黙が流れた。風は相変わらず激しかったが、唸りを忘れてしまっていた。

誰かが音のスイッチを切ったかのような、ハリーの耳が急に聞こえなくなったかのようなくいったい何が起こったのだろうか？

すると、あの恐ろしい感覚が、冷たい波がハリーを襲い、心の中に押し寄せた。

ハリーはグラウンドに何かがうごめいているのに気づいた……。

考える余裕もなく、ハリーはスニッチから目を離し、下を見下ろした。

少なくとも百人の吸魂鬼がグラウンドに立ち、隠れて見えない顔をハリーに向けていた。

氷のような水がハリーの胸にヒタヒタと押し寄せ、体の中を切り刻むようだった。

そして、あの声が、また聞こえた……誰かの叫ぶ声が、ハリーの頭の中で叫ぶ声が……女の人だ……。

Shaking his sodden bangs out of his eyes, he squinted back into the stands. The dog had vanished.

“Harry!” came Wood’s anguished yell from the Gryffindor goal posts. “Harry, behind you!”

Harry looked wildly around. Cedric Diggory was pelting up the field, and a tiny speck of gold was shimmering in the rain-filled air between them —

With a jolt of panic, Harry threw himself flat to the broom-handle and zoomed toward the Snitch.

“Come on!” he growled at his Nimbus as the rain whipped his face. “*Faster!*”

But something odd was happening. An eerie silence was falling across the stadium. The wind, though as strong as ever, was forgetting to roar. It was as though someone had turned off the sound, as though Harry had gone suddenly deaf — what was going on?

And then a horribly familiar wave of cold swept over him, inside him, just as he became aware of something moving on the field below. ...

Before he’d had time to think, Harry had taken his eyes off the Snitch and looked down.

At least a hundred dementors, their hidden faces pointing up at him, were standing beneath him. It was as though freezing water were rising in his chest, cutting at his insides. And then he heard it again. ... Someone was screaming, screaming inside his head ... a

「ハリーだけは、ハリーだけは、どうぞハリーだけは！」

「どけ、バカな女め！……さあ、どくんだ…」

「ハリー、だけは、どうかお願い。私を、私をかわりに殺して——」

白い霧がぐるぐるとハリーの頭の中を渦巻き、痺れさせた——……いったい僕は何をしているんだ？

どうして飛んでいるんだ——あの女を助けないと……あの女は死んでしまう……殺されてしまう……。ハリーは落ちていった。冷たい霧の中を落ちていった。

「ハリーだけは！ お願い……助けて……許して……」

甲高い笑い声が響く。女の人悲鳴が聞こえる。そしてハリーはもう何もわからなくなった。

「地面がやわらかくてラッキーだった」

「絶対死んだと思ったわ」

「それなのにメガネさえ割れなかった」

ハリーの耳に囁き声が聞こえてきた。

でも何を言っているのかまったくわからない。

いったい自分はどこにいるのか、どうやってそこに来たのかその前はいったい何をしてたのか、いっさいわからない。

ただ、全身を打ちのめされたように、体が隅から隅まで痛かった。

「こんなに怖いもの、これまで見たことないよ」

怖い……一番怖いもの……フードをかぶった黒い姿……冷たい……叫び声……。

ハリーは目をパチッと開けた。医務室に横たわっていた。グリフィンボールのクイディッチ選手が頭のとっぺんから足の先まで泥まみれでベッドの周りに集まっていた。

ロンもハーマイオニーも、いましがたプールから出てきたばかりのような姿でそこにい

woman ...

*“Not Harry, not Harry, please not Harry!”*

*“Stand aside, you silly girl ... stand aside, now. ...”*

*“Not Harry, please no, take me, kill me instead —”*

Numbing, swirling white mist was filling Harry’s brain. ... What was he doing? Why was he flying? He needed to help her. ... She was going to die. ... She was going to be murdered. ...

He was falling, falling through the icy mist.

*“Not Harry! Please ... have mercy ... have mercy. ...”*

A shrill voice was laughing, the woman was screaming, and Harry knew no more.

*“Lucky the ground was so soft.”*

*“I thought he was dead for sure.”*

*“But he didn’t even break his glasses.”*

Harry could hear the voices whispering, but they made no sense whatsoever. He didn’t have a clue where he was, or how he’d got there, or what he’d been doing before he got there. All he knew was that every inch of him was aching as though it had been beaten.

*“That was the scariest thing I’ve ever seen in my life.”*

Scariest ... the scariest thing ... hooded black figures ... cold ... screaming ...

Harry’s eyes snapped open. He was lying in

た。

「ハリー！」泥まみれの真っ青な顔でフレッドが声をかけた。

「気分はどうだ？」

ハリーの記憶が早回しの画面のように戻ってきた。

稲妻……死神犬……スニッチ……そして、吸魂鬼……。

「どうなったの？」ハリーがあまりに勢いよく起き上がったので、みんなが息を呑んだ。

「君、落ちたんだよ」フレッドが答えた。

「ざっと……そう……二十メートルかな？」

「みんな、あなたが死んだと思ったわ」アリシアは震えていた。

ハーマイオニーが小さく「ヒクッ」と声をあげた。

目が真っ赤に充血していた。

「でも、試合は……試合はどうなったのーやり直しの？」ハリーが聞いた。

誰もなんにも言わない。恐ろしい真実が石のようにハリーの胸の中に沈み込んだ。

「僕たち、まさか……負けた？」

「ディゴリーがスニッチを取った」ジョージが言った。

「君が落ちた直後にね。何が起こったのか、あいつは気がつかなかったんだ。振り返って君が地面に落ちているのを見て、ディゴリーは試合中止にしようとした。やり直しを望んだんだ。でも、むこうが勝ったんだ。フェアにクリーンに……ウッドでさえ認めたよ」

「ウッドはどこ？」ハリーは急にウッドがいないことに気づいた。

「まだシャワー室の中さ」フレッドが答えた。

「きっと溺死するつもりだぜ」

ハリーは顔を膝に埋め、髪をギュッと握った。フレッドはハリーの肩をつかんで乱暴に揺すった。

the hospital wing. The Gryffindor Quidditch team, splattered with mud from head to foot, was gathered around his bed. Ron and Hermione were also there, looking as though they'd just climbed out of a swimming pool.

“Harry!” said Fred, who looked extremely white underneath the mud. “How’re you feeling?”

It was as though Harry’s memory was on fast forward. The lightning — the Grim — the Snitch — and the dementors …

“What happened?” he said, sitting up so suddenly they all gasped.

“You fell off,” said Fred. “Must’ve been — what — fifty feet?”

“We thought you’d died,” said Alicia, who was shaking.

Hermione made a small, squeaky noise. Her eyes were extremely bloodshot.

“But the match,” said Harry. “What happened? Are we doing a replay?”

No one said anything. The horrible truth sank into Harry like a stone.

“We didn’t — *lose*?”

“Diggory got the Snitch,” said George. “Just after you fell. He didn’t realize what had happened. When he looked back and saw you on the ground, he tried to call it off. Wanted a rematch. But they won fair and square ... even Wood admits it.”

“Where is Wood?” said Harry, suddenly realizing he wasn’t there.

「落ち込むなよ、ハリー。これまで一度だってスニッチを逃したことはないんだ」

「一皮ぐらい取れないことがあって当然さ」ジョージが続けた。

「これでおしまいってわけじゃない」フレッドが言った。

「僕たちは一〇〇点差で負けた。いいか？ だから、ハッフルパフがレイブンクローに負けて、僕たちがレイブンクローとスリザリンを破れば……」

「ハッフルパフは少なくとも二〇〇点差で負けないといけない」ジョージだ。

「もし、ハッフルパフがレイブンクローを破ったら……」

「ありえない。レイブンクローが強過ぎる。しかし、スリザリンがハッフルパフに負けたら……」

「どっちにしても点差の問題だな……一〇〇点差が決め手になる」

ハリーは横になったまま黙りこくっていた。負けた……初めて負けた。

自分は初めてクィディッチの試合で敗れたんだ。

十分ほどたったころ、校医のマダム・ボンフリーがやってきて、ハリーの安静のため、チーム全員に出ていけと命じた。

「また見舞いにくるからな」フレッドが言った。

「ハリー、自分を責めるなよ。君はいまでもチーム始まって以来の最高のシーカーさ」

選手たちは泥の筋を残しながら、ぞろぞろと部屋を出ていった。

マダム・ボンフリーはまったくしょうがないという顔つきでドアを閉めた。

ロンとハーマイオニーがハリーのベッドに近寄った。

「ダンブルドアは本気で怒ってたわ」ハーマイオニーが震え声で言った。

「あんなに怒っていらっしゃるのを見たこと

“Still in the showers,” said Fred. “We think he’s trying to drown himself.”

Harry put his face to his knees, his hands gripping his hair. Fred grabbed his shoulder and shook it roughly.

“C’mon, Harry, you’ve never missed the Snitch before.”

“There had to be one time you didn’t get it,” said George.

“It’s not over yet,” said Fred. “We lost by a hundred points, right? So if Hufflepuff loses to Ravenclaw and we beat Ravenclaw and Slytherin …”

“Hufflepuff’ll have to lose by at least two hundred points,” said George.

“But if they beat Ravenclaw …”

“No way, Ravenclaw is too good. But if Slytherin loses against Hufflepuff …”

“It all depends on the points — a margin of a hundred either way —”

Harry lay there, not saying a word. They had lost ... for the first time ever, he had lost a Quidditch match.

After ten minutes or so, Madam Pomfrey came over to tell the team to leave him in peace.

“We’ll come and see you later,” Fred told him. “Don’t beat yourself up, Harry, you’re still the best Seeker we’ve ever had.”

The team trooped out, trailing mud behind them. Madam Pomfrey shut the door behind them, looking disapproving. Ron and

がない。あなたが落ちたとき、競技場に駆け込んで、杖を振って、そしたら、あなたが地面にぶつかる前に、少しスピードが遅くなったのよ。それからダンブルドアは杖を吸魂鬼に向けて回したの。あいつらに向かって何か銀色のものが飛び出したわ。あいつら、すぐに競技場を出ていった……ダンブルドアはあいつらが学校の敷地内に入ってきたことでカンカンだったわ。そう言っているのが聞こえた——」

「それからダンブルドアは魔法で担架を出して君を乗せた」ロンが言った。

「浮かぶ担架につき添って、ダンブルドアが学校まで君を運んだんだ。みんな君が……」ロンの声が弱々しく途中で消えた。

しかし、ハリーはそれさえ気づかず、考え続けていた。

いったい吸魂鬼がハリーに何をしたのだろう……あの叫び声は。

ふと目を上げると、ロンとハーマイオニーが心配そうに覗き込んでいた。

あまりに気遣わしげだったので、ハリーはとっさに何かありきたりなことを聞いた。

「誰か僕のニンバスつかまえてくれた？」ロンとハーマイオニーはチラッと顔を見合わせた。

「あの——」

「どうしたの？」ハリーは二人の顔を交互に見た。

「あの……あなたが落ちたとき、ニンバスは吹き飛んだの」ハーマイオニーが言いにくそうに言った。

「それで——」

「それで、ぶつかったの——ぶつかったのよ——ああ、ハリー——あの暴れ柳にぶつかったの」

ハリーはザワッとした。

暴れ柳は校庭の真ん中にポツリと一本だけ立っている凶暴な木だ。

「それで——」ハリーは答えを聞くのが怖か

Hermione moved nearer to Harry's bed.

“Dumbledore was really angry,” Hermione said in a quaking voice. “I’ve never seen him like that before. He ran onto the field as you fell, waved his wand, and you sort of slowed down before you hit the ground. Then he whirled his wand at the dementors. Shot silver stuff at them. They left the stadium right away. ... He was furious they’d come onto the grounds. We heard him ——”

“Then he magicked you onto a stretcher,” said Ron. “And walked up to school with you floating on it. Everyone thought you were ...”

His voice faded, but Harry hardly noticed. He was thinking about what the dementors had done to him ... about the screaming voice. He looked up and saw Ron and Hermione looking at him so anxiously that he quickly cast around for something matter-of-fact to say.

“Did someone get my Nimbus?”

Ron and Hermione looked quickly at each other.

“Er ——”

“What?” said Harry, looking from one to the other.

“Well ... when you fell off, it got blown away,” said Hermione hesitantly.

“And?”

“And it hit —— it hit —— oh, Harry —— it hit the Whomping Willow.”

Harry's insides lurched. The Whomping Willow was a very violent tree that stood alone



った。

「ほら、やっぱー暴れ柳のことだから」ロンが言った。

「あ、あれって、ぶつかられるのが嫌いだろ」

「フリットウィック先生が、あなたが気がつくちょっと前に持ってきてくださったわ」ハーマイオニーが消え入るような声で言った。

ゆっくりと、ハーマイオニーは足元のバッグを取り上げ、逆さまにして、中身をベッドの上に空けた。

粉々になった木の切れ端が、小枝が、散らばり出た。

ハリーのあの忠実な、そしてついに敗北して散った、ニンバスの亡骸だった。

in the middle of the grounds.

“And?” he said, dreading the answer.

“Well, you know the Whomping Willow,” said Ron. “It — it doesn’t like being hit.”

“Professor Flitwick brought it back just before you came around,” said Hermione in a very small voice.

Slowly, she reached down for a bag at her feet, turned it upside down, and tipped a dozen bits of splintered wood and twig onto the bed, the only remains of Harry’s faithful, finally beaten broomstick.